森林レンジャーがゆく（97）

樹林地をつくる

東京都は平井川の整備を進めています。今年度、菅瀬橋付近の護岸土手に管理用通路が整備されました。この工事の資材置き場に使っていた市有地を緑地（樹林地）として整備しました。この場所は平坦地で、土質は砂礫（されき）、沢庵石（たくあんいし）のような大きさの石も混じっていました。さらに、工事車両の転圧もあり植栽には条件が悪く穴も簡単には掘れませんでした。悩みましたが、まず、縦２m×横２m、深さ60cmの植栽桝６か所を重機で掘削してもらい、客土（きゃくど）して植栽基盤の整備を行い植栽にこぎ着けました。植栽樹種は、高木のヤマザクラ２本、ヤマボウシ２本、モミジ、イタヤカエデの６本と林床を構成する中低木のオオムラサキ、ムラサキシキブ、ヤマブキ、シモツケ、ガマスミです。まだ、植栽直後なので、頼りなく見えますが、時を経れば自然林に近い姿になると期待しています。また、この場所には大きな桑の木があります。この桑は、自然樹形を保った状態で、たくさんの実をつけて鳥や小動物の食料供給源になっています。なぜ、桑の木があるのか考えてみると、江戸時代末期の1859年（安政６年）に横浜港が開港して蚕種（さんしゅ）（蚕の卵（かいこ））や生糸が日本の主要輸出品目となり、西多摩地域でも羽村

を中心に養蚕が盛んに行われ、人々の生活を支えていました。蚕は桑の葉を食べて育つことから、西多摩地域の養蚕が産業化した1859年ころから桑の木が増えてきたと考えられます。この桑の木も当時からあるとすると樹齢160年以上となってしまいます。その後、1918年（大正７年）ころには、西多摩地域は日本屈指の生糸産地に成長しました。この時代から考えると樹齢102年となります。いずれにしても、この地の養蚕文化の遺産といえる桑の大木です。

この緑地が、桑の大木を含めて１つの樹林地になって、私たちの生活に潤いを与えるとともに、いろいろな生き物へ餌を供給する「共存の樹林地」になることを期待しています。（杉野）